

追憶

——満洲点描——

執筆：西田純明

編集：尹国花

「満洲」、この言葉を聞いただけで、一瞬にして私の脳裏に現中国東北部にひろがる雄大な大平原の光景がうかんでくる。

記憶としては4-5才頃だったか、中国人街の中に我が家はあった。お隣は白系ロシア人とよばれていた家族が住んでいた。後で聞いたところ「あの人達は元貴族か、ブルジョア階級で、革命が起きてからこの地に逃げてきたのさ」と教えられた。その家で動物をいろいろ飼っていたが、なかでも背の高い七面鳥の一番威張っていた親分に追いかけられ、必死に逃げ回ったことが何度もあった。クリスマスにお隣に招待され、カチカチにかしこまってあまり楽しくなかった記憶がある。その後、例の親分の姿を見かけなくなった。不思議に思い、母に「あの鳥どうしたんだろうね」と尋ねたら、こともなげに「クリスマスの時料理されちゃったの」と教えられ、びっくり仰天した。そういえば大きな鳥肉の丸焼きがテーブルの上に乗っていたのを思い出し、なんともいえない複雑な気持ちになったものだ。

近くに中国人の靴を作っている店があった。3-4人の職人さんが口に太い糸を啣えて忙しく働く姿を終日飽きもせず眺めていたのが日課だったのだが、今考えると邪魔な小僧をよく追い払わなかったものだと思う。ある日、昼食の時間になり、早々に帰ろうとして、食事の様子をチラと見ると、片手でまんとう（肉まんに具がなにもはっていないやつ）を食べ、もう片方にネギ1本をもってバリバリかじっている。その簡素な食事をみて、貧しさよりも活気あふれるバイタリティみたいなものを感じたものだ。あの皮のにおいに満ちた作業場はいまだに懐かしく思われる。

また、通りの向いにロシア人の太ったお婆さんのいる店があり、よく使いに出された。店の棚には大きな瓶が並び、様々なピクルスがあった。なかでも大き目のきゅうりの漬物は美味しく、あの甘酸っぱい味は忘れ難いものの1つだ。

住んでいたこの町はハイラルと言い、ソ連邦の国境に近く、一度馬車で郊外を

走った時、遠くに日本軍の兵舎があり、歩哨が銃を構え立っているのがみえた。1939年、関東軍がソ連軍と衝突したノモンハン事件があり、この兵営からも出撃し痛手を被って帰還してきたのを覚えている。

1940年、ようやく学齢に達し、在満日本人小学校に入学。1年生となる。父の転勤により、ソ満国境の満洲里に移る。その年12月、太平洋戦争勃発。しかし、日常生活はさして変わらず、首にスケート靴をぶら下げ、学校に通っていた。

秋のころには、途中でロシア人の修道院があり、尼さんたちが真っ黒なガウンを着てベンチに腰かけ、黄色の銀杏の葉の舞い降りるなかで、にこやかに談笑している姿を眺め、その色合いのコントラストの鮮やかさとゆったりとした空間が何故か私の記憶に深く残っている。

その後、しばらく東京に戻り、1945年2月、満洲吉林省延吉に移る。同年8月敗戦。ソ連軍が進駐してきた。10月、父が捕虜収容所に入れられた後、やむを得ず稼ぎにでる。市場で「大福」を仕入れ、木箱に並べ首にかけ、街中を売り歩く。外出している日本人は少なく、金もあまりない。買ってくれるのは中国と朝鮮の人だけだ。

ある日、最後に残った「大福」2個がなかなか売れない。一日の利益がその2個に集中しているというのに、腹はへるし、そのうち、えいくそ、とばかり口の中へいられてしまった。すると、どこかでみていた

らしい朝鮮の中学生があらわれ、「駄目じゃないか、売り物を自分で食べるやつがあるか」とお説教されてしまった。そのあと、とぼとぼ家路につきながら、なぜか嬉しさがこみあげてきた。敗戦国のこどもが少しでも家計の足しにと物売り姿をみて哀れに思い、気合をいれてくれたのだと思うと気持ちが明るくなり、忘れられない思い出となった。

60才を過ぎ、中国各地を観光するようになった。そのうち、実弟が自分の生まれた所にぜひ行ってみたいと言う。それはハイラルだ。しかし、その前にまず親父が無念の死を遂げたかの延吉に墓参に（墓はないのだが）行くのが順序だろうとなり、現在まで延吉5回、ハイラル、満洲里各2回たずねた。全部弟夫婦との両カップルで旅したのだが、50年強の歳の隔たりは大きく、中国は予想以上に変容していた。延吉でホテルの支配人が日本に留学していたと聞き、通訳をお願いして昔住んでいた所とか学校、収容所など尋ねまわったが、知る人は皆無だった。終戦時20才としても、現在は70-80になる。平均寿命が日本より短いとなれば、昔のことを知る人は少なくて当然となる。

延吉市内は、以前平屋が大半だったが、今では堂々たるビルが林立し、馬糞まじりの砂ほこりにまみれた道路が完全舗装されている。今浦島になり果てた私は、案内役の役目を全うすることは出来なかった。

戦後、市内でおばあさんが1人でやっ

ていた冷麺屋に行ったことがある。シーソーみたいな装置で、足で踏むと杵が麺の固まりをたたき仕組みだ。大変美味で、忘れられない思いを抱いていたら、なんと冷麺専門の大きな店が出来ていて、客も大勢で、にぎわっていた。毎回市を尋ねるとその店に駆けつける。

河川敷で開催されている朝市にも、よく行った。餅も臼でつきながら売っていたし、高級品扱いされているような犬の肉もならんでいた。衣料品の店舗もごった返していた。

ハイラルでは、ガイドを頼み観光をしたが、一度間違えて中国人の行くべき場所に案内された。そこは日本軍の古いトーチカがあり、周辺には地下壕がはりめぐらされ、壁には白いペンキで大きく「忘れることなかれ」とあり、日帝の暴虐を指弾する言葉が書かれていた。軍国主義日本の罪は重く、隣国同士、和解にいたるのは長期間必要だと反省をこめ痛感した次第である。

次の訪問地、満洲里に着いてその発展ぶりに驚嘆した。ロシアとの交易が盛んで、人と物資の一大集散地と化していた。高層ビルが立ち並び、立派なホテルも多い。ロシア語で書かれた看板の店も多く、街中ロシア人が家族連れで歩いていた。この地も例外なく、昔の面影は皆無だった。あの懐かしい修道院もなかった。郊外にでると、丘陵地帯に風力発電の風車が無数に立っていた。この辺境の地にも新

生中国発展の勢いは加速している。

北京経由で帰国するため空港に行く。折しも日没前で、西の地平線に大きな太陽が真っ赤に輝いていた。振り返ると己の影がどこまでも長く伸びていた。日本ではあまり見られない風景を見、満足して機に搭乗したことを思い出す。

幼い頃、僅か4-5年ほどしかいなかった満洲も、様々な民族が暮らしていたのだが、しかし人間の根幹としてはなんら大差ないというのが実感である。大興安嶺の奥地に暫くいたことがあったが、冬はマイナス30から40度という厳寒の地で川は結氷する。遅い春が訪れると、氷が大きな音を立てて割れ、一気に下っていく。住民は皆興奮して川に向かって走り、じっと流れをみつめるのだ。

歴史を振り返れば、隣国中国があらゆる面で先進国であった時代は長く、文化、宗教、思想、その他漢字も輸入してしまった。その恩恵を受けた日本は明治維新後、近代化が急速に進み、天狗になって富国強兵を目論み、近隣諸国のみならず自国民にも大きな犠牲を強いる結果を招いた。この過去の歴史を猛省し、平和な日本を目指すべきだ。

川の流れは止まらず、季節がめぐれば氷も割れる。中国と日本もいずれ暖かい春風が吹き、共に繁栄していくことを願いながら、今後も交流を続けていきたい。



中国東北部の地図 (作成者：大野絢也)